

平成 28 年度  
青森県埋蔵文化財発掘調査報告会



平成 28 年 12 月 10 日 (土)

会場 青森県総合社会教育センター

主催 青森県埋蔵文化財調査センター

## 日 程

### ■スライド等による発掘調査の報告（2階 大研修室）10:30～15:15

開催挨拶（青森県埋蔵文化財調査センター所長） 10:30～10:35（5分）

- 1 郷山前村元遺跡外（県埋蔵文化財調査センター） 10:35～10:55（20分）
- 2 夷堂遺跡（県埋蔵文化財調査センター） 10:55～11:15（20分）
- 3 野口貝塚（三沢市教育委員会） 11:15～11:35（20分）

質疑応答—— 11:35～11:50

休憩・遺物展示等見学—— 11:50～13:00

- 4 内田（1）遺跡（県埋蔵文化財調査センター） 13:00～13:20（20分）
- 5 安部遺跡（尻労安部洞窟）（尻労安部洞窟遺跡発掘調査団） 13:20～13:40（20分）
- 6 一王寺（1）遺跡（八戸市埋蔵文化財センター是川縄文館） 13:40～14:00（20分）

質疑応答・休憩—— 14:00～14:20

- 7 沢部（1）遺跡（県埋蔵文化財調査センター） 14:20～14:40（20分）
- 8 弘前城本丸石垣（弘前市公園緑地課） 14:40～15:00（20分）

質疑応答—— 15:00～15:15

### ■出土品とパネルの展示（2階 第1研修室）10:00～16:00

- ・報告遺跡から出土した遺物をパネル展示と併せてご覧いただけます。
- ・整理作業中の弘前市沢部（2）遺跡と東北町東道ノ上（3）遺跡から出土した遺物もご覧いただけます。

### ■青森県立図書館による関連図書の展示及び貸出

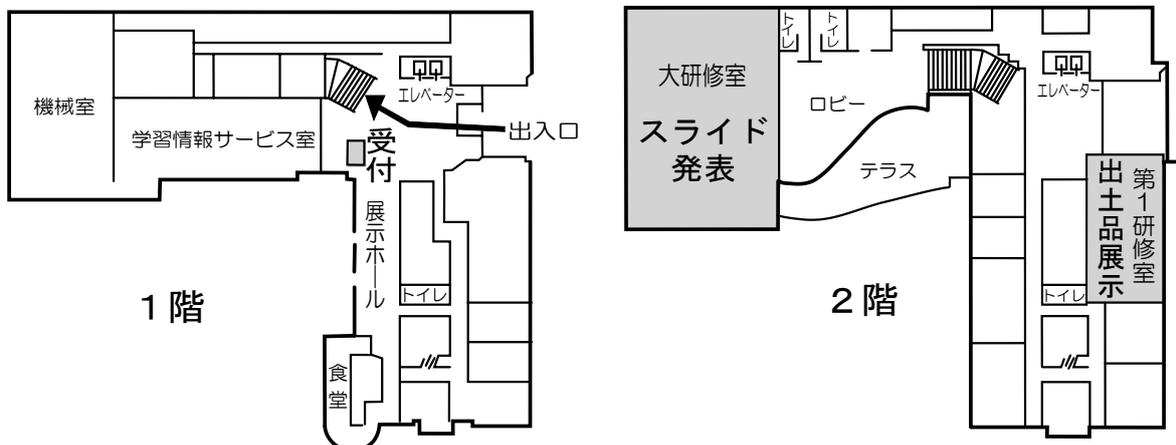
（2階 第1研修室）10:00～16:00

本報告会は県民カレッジ単位認定講座です。 単位認定希望の方は、1階受付までお知らせ下さい。
--

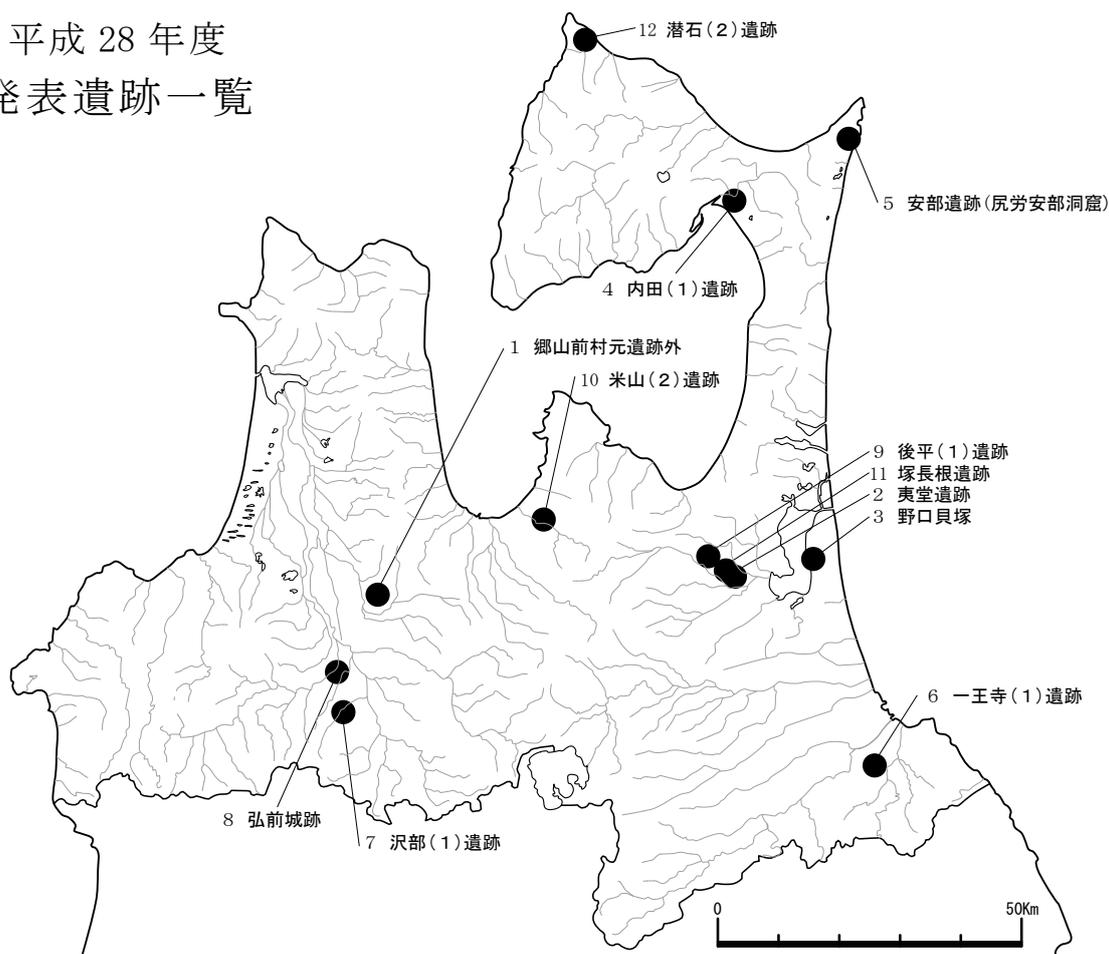
# 目 次

目 程	.....	i
目 次	.....	ii
平成 28 年度 発表遺跡一覧	.....	iii
1 郷山前村元遺跡外	.....	1
2 夷堂遺跡	.....	3
3 野口貝塚	.....	4
4 内田（1）遺跡	.....	6
5 安部遺跡（尻労安部洞窟）	.....	7
6 一王寺（1）遺跡	.....	9
7 沢部（1）遺跡	.....	11
8 弘前城本丸石垣	.....	12
紙上報告		
9 後平（1）遺跡	.....	14
10 米山（2）遺跡	.....	15
11 塚長根遺跡	.....	16
12 潜石（2）遺跡	.....	17
用語解説	.....	18
年 表	.....	22

【会場のご案内】 スライド発表・出土品の展示は2階で行います。



# 平成 28 年度 発表遺跡一覧



番号	遺跡名	所在地	調査担当機関	調査原因
1	郷山前村元遺跡外	青森市浪岡大字郷山前字村元地内	県埋文センター	県道常海橋銀線道路改築事業
2	夷堂遺跡	七戸町字夷堂	県埋文センター	国道 394 号榎林バイパス道路改築事業
3	野口貝塚	三沢市大字三沢字早稲田	三沢市教育委員会	保存目的
4	内田(1)遺跡	むつ市大字田名部字内田地内	県埋文センター	一般国道 279 号むつ南バイパス道路改築事業
5	安部遺跡(尻労安部洞窟)	東通村大字尻労字安部	尻労安部洞窟遺跡発掘調査団・慶應義塾大学	学術調査
6	一王寺(1)遺跡	八戸市大字是川字中居、同字一王寺	八戸市埋蔵文化財センター是川縄文館	史跡整備のための内容確認調査
7	沢部(1)遺跡	弘前市大字小栗山字沢部地内	県埋文センター	県営小栗山地区通作条件整備事業
8	史跡津軽氏城跡弘前城跡	弘前市大字下白銀町	弘前市公園緑地課	史跡整備(弘前城本丸石垣修理事業)
9	後平(1)遺跡	七戸町字後平	県埋文センター	一般国道 45 号上北天間林道路建設事業
10	米山(2)遺跡	青森市大字宮田字米山地内	県埋文センター	青森県新総合運動公園建設事業
11	塚長根遺跡	七戸町字塚長根	県埋文センター	国道 394 号榎林バイパス道路改築事業
12	潜石(2)遺跡	風間浦村大字蛇浦字潜石地内	県埋文センター	県営下北北部地区中山間地域総合整備事業

ごうさんまえむらもといせき  
郷山前村元遺跡ほか

— 縄文時代中期と平安時代中期の集落跡、  
江戸時代の街道 —

所在地：青森市浪岡大字郷山前字村元（郷山前村元遺跡）

：同大字吉野田字熊沢（熊沢溜池遺跡）

：同大字郷山前字上野（上野遺跡）

調査機関：青森県埋蔵文化財調査センター

調査期間：平成 28 年 4 月 19 日～10 月 26 日

調査原因：県道常海橋銀線道路改築事業

### 遺跡の概要

郷山前村元遺跡・熊沢溜池遺跡・上野遺跡は、青森市役所浪岡庁舎から西へ約 3 km の場所に位置しています。岩木山や津軽平野を望むこの地は、梵珠山南西の裾野に広がる標高約 30～40 m ほどの低位段丘上の先端に位置し、周辺は沢や溜池が多く、遺跡がたくさんあります。この一帯は、近年、発掘調査が多く行われており、上野遺跡は 2006 年度と 2008 年度、熊沢溜池遺跡は 2015 年度にも調査されています。

### 遺構の種類

【郷山前村元遺跡】溝跡 16 条（円形周溝の可能性のあるものを含む）、土坑 2 基と少なく、上野遺跡を中心に形成された集落跡の外側にあたると考えられます。

【熊沢溜池遺跡】累計で竪穴建物跡 25 棟、掘立柱建物跡 4 棟、溝跡 27 条、柵列・塀跡 4 条、土坑 39 基、井戸跡 2 基、柱穴 89 基です。今年度は、平安時代中頃の集落跡を囲む大溝や、この周辺では珍しい縄文時代晩期初頭の土坑がみつかりました。

【上野遺跡】累計で竪穴建物跡 27 棟、掘立柱建物跡 8 棟、溝跡 28 条、柵列・塀跡 1 条、土坑 28 基、柱穴 55 基、円形周溝 2 基、性格不明遺構 1 基がみつかりました。今年度は、縄文時代中期中葉（円筒上層 e 式段階）の集落跡（竪穴住居跡・掘立柱建物跡）のほか、平安時代中期の大溝で囲まれた集落（竪穴建物跡・掘立柱建物跡・柵列・溝）や円形周溝（墓？）などがみつかりました。2008 年度の調査では、江戸時代の街道（下之切通）も発見されています。

### 遺物の概要

【郷山前村元遺跡】段ボール 3 箱分の縄文土器と平安時代の土器がみつかりました。

【熊沢溜池遺跡】累計で段ボール 67 箱分あり、今年度は平安時代の土師器・須恵器のほか、木製品・炭化米などが 5 箱分みつかりました。

【上野遺跡】累計で段ボール 57 箱分あります。今年度は、縄文時代前期～中期の土器・石器・土偶、平安時代の土師器・須恵器が 27 箱出土しました。2006 年度には、県内では珍しい東濃（岐阜県）産の緑釉陶器片りよくゆうとうきの加工品もみつかりました。



平安時代中期の集落跡（熊沢溜池遺跡）

## 遺跡の特徴

近接する3遺跡の成果からわかってきたことは、まず縄文時代前期頃から上野遺跡を中心に人間の活動痕跡が認められ、縄文時代中期中頃になると小規模な集落が一時的に形成されていた様子です。さらに3000年以上経った平安時代中頃（西暦950年前後）になると、上野遺跡と熊沢溜池遺跡それぞれで、大溝で囲まれた集落が築かれており、とりわけ熊沢溜池遺跡では建物等の施設が濃密だった様子うかがえます。これらのムラでは、農耕や製鉄などを生業としつつ、当時珍しい<sup>りよくゆうとうき</sup>緑釉陶器なども手に入れていたようです。江戸時代になると、弘前藩により新田開発と村の形成、溜池の構築、街道の整備などが進められ、今日<sup>の</sup>原形が出来上がったと考えられます。（佐藤・岡本）



竪穴建物跡（縄文時代中期中葉）



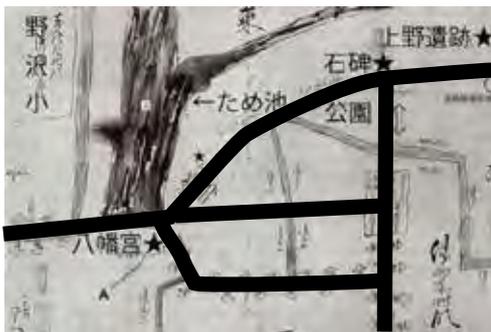
掘立柱建物跡（縄文時代中期中葉か）



竪穴建物跡（平安時代中期）



墓か（平安時代中期）



郷山前村漆山絵図  
（弘前市立博物館蔵、幕末か）



現在の地図と左絵図の範囲

### 遺跡の概要

夷堂遺跡は七戸町役場から東南東約 4.5 km に位置し、坪川の左岸に接する標高 24 m ほどの丘陵上に立地しています。南北に細長く延びる調査区の北半は平坦地、南半は斜面地となっています。

### 遺構の種類

縄文時代と平安時代の遺構を検出しました。縄文時代の遺構は、溝状土坑 19 基、土坑 5 基で、いずれも狩猟用の落とし穴です。

平安時代の遺構は、竪穴建物跡 40 棟、土坑 54 基、円形周溝 1 基、溝跡 9 条、大溝跡 1 条、土塁基底部とみられる硬化範囲 1 カ所、柱穴 178 基、鍛冶・不明遺構 25 基などです。竪穴建物跡は 9 世紀中葉～10 世紀後半にかけて構築されています。調査区の北半平坦地から南半斜面地にかけて広く分布していますが、集落最終時期の 10 世紀後半に平坦地と斜面地の境界付近に大溝跡が造られると、大溝南側の斜面地へとまとまる傾向があるようです。また、10 世紀後半の建物跡は、屋内に 2～4 基ほどの鍛冶炉を伴うものが確認されています。

### 遺物の概要

出土遺物は段ボールで 54 箱分出土しました。平安時代の土器が主体ですが、羽口や鉄滓<sup>てつさい</sup>といった鍛冶に関連する遺物も多く出土しています。縄文時代の遺物としては、早期後半の土器や石器が少量出土しました。

### 遺跡の特徴

発掘調査の結果、夷堂遺跡は縄文時代には狩猟場として利用され、平安時代には集落が形成されていたことが明らかとなりました。

平安時代の集落は 9 世紀中葉～10 世紀後半にかけて存続していますが、この集落の特徴の一つとして、存続時期全体を通し、多くの建物跡から羽口が出土していることが挙げられます。特に、集落最終時期である 10 世紀後半には、屋内に鍛冶炉を伴う建物が多くみられることから、集落内で専門的に鍛冶を行っていた可能性が高いと考えられます。（鈴木和子）



第 36 号竪穴住居跡（屋内に鍛冶炉をもつ）

のぐち  
野口貝塚

－青森最古級の縄文貝塚－

所在地：三沢市大字三沢字早稲田

調査機関：三沢市教育委員会

調査期間：平成 28 年 4 月 12 日～ 9 月 30 日

調査原因：保存目的

### 遺跡の概要

野口貝塚は小川原湖東岸の中央部、湖岸から 100 m 程離れた標高 4 ～ 30 m の段丘上に立地します。

昭和 36 (1961) 年、土地所有者が縄文時代晩期の亀ヶ岡式土器や石器等を多数発掘したことがきっかけで遺跡の存在が明らかとなりました。その翌年には立教大学が発掘調査を行い、主に海水域に棲息する貝類で構成される縄文時代早期末～前期初頭の貝塚が確認されています。

平成 24 年度からは、三沢市教育委員会が個人農地造成に先立ち遺跡の内容確認のための発掘調査を実施してきました。その結果、北海道・北東北最古級（青森県内最古）となる早期中葉の貝塚を検出しました。なお、本遺跡の北約 100 m に位置する早稲田 (1) 貝塚からも同時期の貝塚が発見されています。

このような成果をうけ、三沢市教育委員会では今年度から調査目的を両遺跡の保存（国史跡指定）に向けた遺跡の内容確認に変更し、発掘調査を実施しました。



縄文時代早期中頃の貝塚（壁面にみえるのは縄文時代前期初頭～前葉の貝塚）

### 遺構の種類

縄文時代早期の貝塚は、前年度に調査した縄文時代前期初頭～前葉の貝塚の下に広がっています。前年度は検出と時期の特定までとし、本格的な発掘調査は今年度に行いました。

貝塚は東西 1.5 m 以上×南北約 3.0 m の範囲に、最も厚い部分で約 20 cm 堆積していました。ハマグリをはじめとする海水域に棲息する貝類が主体ですが、調査中は少量の魚骨も確認しています。また、貝塚の内部や直下からは「ムシリ I 式」という土器が出土しており、貝塚はこの時期に形成されたことを改めて確認しました。

このほか、これまで未調査地だった遺跡南西部の谷地形部分で簡易的なボーリング調査を実施しました。その結果、新たに 4ヶ所で貝塚の分布を確認し、遺跡南半部は廃棄域として広範囲に利用されていたことが明らかとなりました。これらの貝塚の形成時期は、現地表面からの深さから縄文時代前期と推定されます。

### 遺跡の特徴

本遺跡では、今年度調査した縄文時代早期から前期にかけて、少なくとも 3 時期の貝塚が検出されています。この時期は、地球の温暖化により現在の内陸部まで海水が入り込んだ「縄文海進」のなかでも海水面の上昇が進行する頃からピークに達する頃に相当します。

また、本遺跡が所在する小川原湖湖沼群の周辺は、国内有数の貝塚遺跡（貝塚を伴う遺跡）の密集地です。なかでも小川原湖東岸域は縄文時代早期～前期の貝塚遺跡が並ぶように分布しており、しかもそれらの連続性が迎れるという、特徴的な地域となっています。

貝塚にはその当時の食料事情や生業、自然環境等を知る貴重な情報が豊富に残されています。今後、各時期の貝塚の詳細を調べてゆくことで、生業や自然環境、それらの移り変わりを知る手掛かりを得られることが期待されます。

(工藤 司)



ムシリ I 式土器の出土状況

# うちだ 内田(1)遺跡

— 縄文時代後期と平安時代の集落 —

所在地：むつ市大字田名部字内田

調査機関：青森県埋蔵文化財調査センター

調査期間：平成28年4月19日～同年10月14日

調査原因：一般国道279号むつ南バイパス道路改築事業

## 遺跡の概要

内田(1)遺跡は、むつ市役所から南東方向に直線距離で約4.3km、田名部川の下流に広がる田名部低地に面した段丘縁辺に位置しています。標高は調査区内で17～22mです。調査区周辺は東西方向に入る沢によって、丘陵のような起伏のある地形となっています。調査の結果、縄文時代後期と平安時代の集落跡が見つかりました。

## 遺構の種類

縄文時代は竪穴建物跡3棟、掘立柱建物跡を含む柱穴505基、土坑137基、捨て場遺構5ヶ所、焼土遺構7基、埋設土器3基などです。特徴的な遺構として、調査区南西側で半円状に分布する柱穴群を確認しました。また、大型の柱穴を中心に4本柱または6本柱の掘立柱建物跡を構成することがわかりました。建物の軸方向は円の中心方向を概ね向いています。柱穴群に囲まれた内部は遺構の密度が低くなっています。また、柱穴群は調査区西側に分布が拡がり、環状になるものと推測されます。土坑は掘り込みの深いフラスコ状土坑と、比較的掘り込みの浅い楕円形の平面形を持つものを確認しました。捨て場遺構は沢頭や斜面の落ち際などに形成しており、土器や土偶等の製品類の他、焼けた土が廃棄されている箇所もありました。平安時代は竪穴建物跡5棟、掘立柱建物跡1棟、土坑3基を検出しました。遺構の堆積土中に白頭山一苦小牧火山灰を確認できたものが多く見つかりました。

## 遺物の概要

段ボール箱で土器が228箱、石器が86箱、土・石製品が9箱出土しました。土器は縄文時代後期初頭～前葉が主体で、捨て場遺構からの出土が最も多くなっています。フラスコ状土坑の下層からは、完形の土器や土製品が多く出土しました。また、廃棄された多量の二枚貝が層状に堆積している例も確認できました。

## 遺跡の特徴

縄文時代後期の掘立柱建物跡が環状に配置される例は、下北半島では3例目です。また、平安時代の集落跡は、下北半島では調査事例が少ない上、第3号竪穴建物跡内土坑から出土したしゃくじょう錫杖状鉄製品は、下北半島で初見資料となります。

(浅田 智晴)



半円状に配置された柱穴群

あべ しつかりあべどうくつ  
**安部遺跡(尻労安部洞窟)**

— 旧石器時代の洞窟遺跡 —

所在地：下北郡東通村大字尻労字安部 39-3

調査機関：尻労安部洞窟遺跡調査団・慶應義塾大学

調査期間：平成 28 年 7 月 31 日～8 月 11 日

調査原因：学術調査

### 遺跡の概要

尻労安部洞窟は、下北半島北東部に位置する石灰岩洞窟です。桑畑山の南東麓、標高約 33m の地点に開口する当洞窟は、今日、間口 3.3m、奥行き 2.5m の岩陰状をなし、旧石器・縄文・弥生時代の遺跡として登録されています。慶應義塾大学を中心とする調査団は、本遺跡において旧石器時代の石器・動物骨・人骨の発見を目指し、2001 年度より学際的な調査・研究を重ねています。

これまでの調査によって、II～VI 層から縄文時代（早～後期）の土器、石器、人骨、動物骨が発掘されており、旧石器時代の文化層に当たる XIII 層～XV 層からは定型的な旧石器 5 点と動物骨が近接して出土しています。

### 本年度の調査成果

本年度は過年度から調査を進めている洞窟奥部に加え、洞窟東側の掘削にも着手しました。その結果、I～V 層から土器や石器、多数の骨片や貝類が出土しました。わけても縄文時代中期～後期に比定し得る II 層を中心に少なくとも 2 個体に由来する 30 点以上ものオオヤマネコの遺体が含まれていたことは特筆に値します。同種は、今日もヨーロッパ・シベリア・北アメリカ北部に生息していますが、日本列島では縄文時代晩期以降に地域絶滅したと考えられています。

オオヤマネコの遺体は、これまでに草創期から晩期に比定される約 20 遺跡から出土していますが、本遺跡ほどの多出事例は知られていません。それだけに、本年度の調査で同種に保存状態が良くかつほぼ全身に及ぶ骨が得られたことは大きな意義をもちます。II 層から出土したヒトの歯と獣骨片からは、約 4,400～4,800calBP という放射性炭素年代が得られているため、オオヤマネコの遺体もこの時期の遺物とみられます。目下、年代測定とともに DNA 鑑定、同位体分析も進めており、それらの結果が得られた暁には、同種の系統や生態について重要な知見が得られることも期待できます。

II 層からはこの他に、縄文時代後期の石器や土器、人骨、シカをはじめとした動物骨が出土しました。また、III 層直上にはムラサキインコを主体とする混土貝層が堆積していました。III～V 層からは早期の土器や小型陸獣の遺体も得られました。他方、洞窟奥部の XIV 層からはウサギの歯などが少量発見されたにとどまり、新たな知見を得るには至りませんでした。もっとも、今年度の調査によって、洞窟奥部が北東部に広がりをもつ可能性が高まりました。それだけに、次年度以降、東側調査区の下層から得られる発掘成果に期待がもてます。

※ 市田直一郎、奈良貴史、佐藤孝雄、渡辺丈彦、鈴木敏彦、澤田純明、澤浦亮平、平澤悠、吉永亜紀子、石本のえる、小谷部優、吉田友里恵

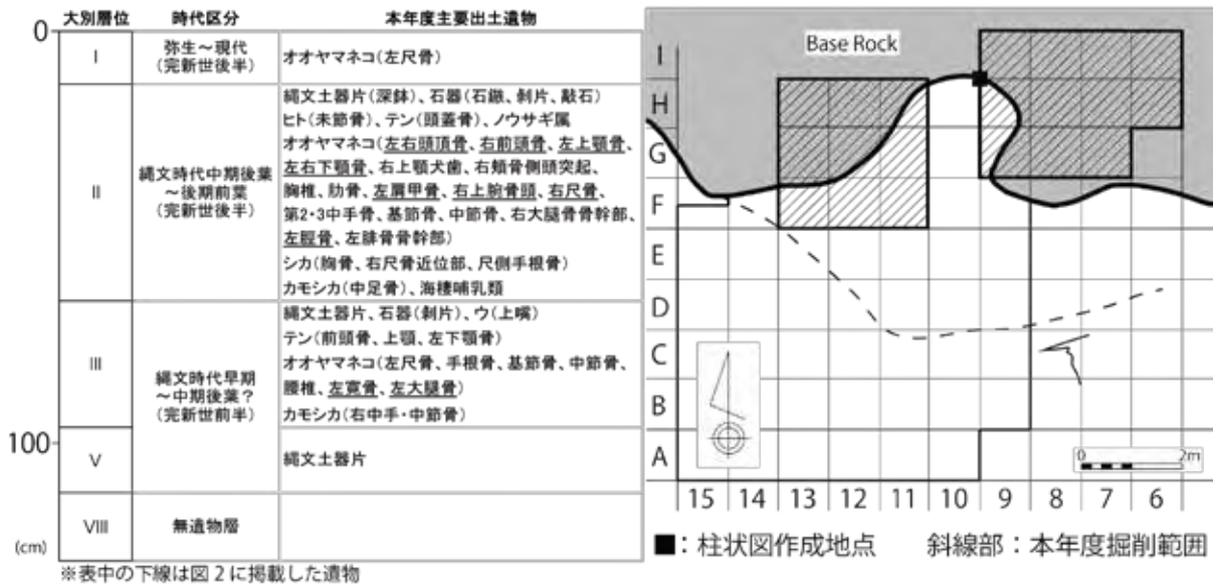


図1. 土層堆積状況概念図



図2. オオヤマネコの遺体群

1. 右下顎骨 2. 左上顎骨 3. 頭骨 4. 右下顎骨 5. 左下顎骨 6. 左肩甲骨
7. 右上腕骨頭 8. 右尺骨 9. 左寛骨 10. 左大腿骨 11. 左脛骨

# 一王寺(1)遺跡

— 縄文時代前期の貝塚と中期のムラ —

所在地：八戸市大字是川字中居、同字一王寺  
調査機関：八戸市埋蔵文化財センター是川縄文館  
調査期間：平成 28 年 8 月 22 日～10 月 31 日  
調査原因：史跡整備のための内容確認調査

## 遺跡の概要

本遺跡は八戸市の中心部から南へ約 4 km に位置し、新井田川の左岸に立地しています。標高 70 ～ 100 m の丘陵と、標高 18 ～ 44 m の新井田川へ向かう緩斜地にかけて広がっています。遺跡の南端には寺ノ沢、北から北東端には長田沢と呼ばれる沢地があります。遺跡の総面積は 32 万 6 千 m<sup>2</sup> です。

縄文時代前期から中期（今から約 6,000 年～4,000 年前）の円筒土器文化期を中心とした大規模な集落であり、昭和 32 年（1957）に中居遺跡・堀田遺跡とともに「是川石器時代遺跡」として国の史跡に指定されています。八戸市では、平成 7 年（1995）から 22 年（2010）まで範囲・内容確認のための発掘調査を行ってきました。その結果、一王寺(1)遺跡と堀田遺跡においてその範囲が確定し、平成 25 年に両遺跡の重要な範囲の追加指定が決定しました。

平成 26 年度からは、昭和 32 年の史跡指定地内の内容確認調査を開始し、85 年前の発掘調査記録にある「一王寺貝塚」の場所を特定しました。また、貝塚を確認した不整形の 2 つの攪乱坑（SX1、SX2）が、過去の調査記録及び図面より、ひとつが昭和 4 年の大山史前学研究所による発掘調査の B 地点、もうひとつが大正 15 年の長谷部言人・山内清男による C 地点の発掘調査坑である可能性が高いことがわかりました。

## 遺構の種類

今回の調査では縄文時代前期の貝塚と中期の盛土遺構を約 1 m<sup>2</sup> 調査しました（172 トレンチ）。また、昭和 32 年指定地に 2 箇所（188・189 トレンチ）を設定し、約 60 m<sup>2</sup> を調査しました。トレンチからは、縄文時代中期後葉の竪穴住居跡 4 棟、土坑 2 基、集石遺構 1 基、時期不明のピット数基を検出しました。188 トレンチでは 2 × 15m の範囲から 3 棟もの竪穴住居跡がみつき、トレンチの外にさらに複数の住居が広がることが予想されます。

## 遺物の概要

遺物は、縄文土器、土製品（土偶など）、ミニチュア土器、石器（石鏃・石槍・剥片石器・磨製石斧・半円状扁平打製石器など）、骨角器（骨針・装身具など）動物遺存体（ニホンジカ・イルカ、カツオ・スズキ・マグロ・サメ、イガイ・アサリ・アワビなど）、植物遺存体（トチノキ・コナラ種実）などが出土しています。特筆すべき遺物として、被熱して炭化した種実と白色化した骨角器が、188 トレンチの 1 号竪穴住居跡の覆土から出土しました。一緒に出土した土器から、縄文時代中期後葉のものとみられます。

## 遺跡の特徴

172 トレンチの土層は、縄文時代中期の盛土遺構（今から約 4,900 ～ 5,100 年前）と縄文時代前期の貝層（今から約 5,200 から 5,800 年前）に大きく分けられます。今回の調査で、前期の貝層からは縄文土器や石器のほか、シカの骨と一緒に魚の骨（カツオ・マグロ・スズキ・サメなど）、貝がら（イガイ・アサリ・アワビなど）

など海の幸がたくさん出土しました。一方、中期の盛土遺構からは土器や石器のほか、シカの骨と一緒に少量の魚の骨が出土していますが、前期の層と比べて量が少なく、貝がらに至っては全く出土していません。縄文時代前期と中期の違いが、当時の生業や環境の変化によるものなのか、その理由を今後の整理作業を通じて明らかにしていきます。また本遺跡の縄文人は、カツオやマグロなど、外洋性の魚を手に入れて食べていたことがわかりました。彼らは舟で新井田川をつたい海へ出て、漁労を行っていたのかもしれない。

188・189 トレンチでは中期後葉（今から約 4,000 ～ 4,500 年前）の竪穴住居跡 4 棟がみつき、昭和 32 年の史跡指定地に中期後葉の集落が広がることを初めて確認することができました。さらに住居跡の近くに、ほぼ同じ時期の集石遺構もみつき、当時の集落の様子を考えるうえで重要な成果を得られました。（横山 寛剛）



172 トレンチ 盛土遺構と貝塚の断面



188 トレンチ（左）と 189 トレンチ（右）

# さわべ 沢部(1)遺跡

— 津軽平野を望む平安時代の集落 —

所在地：弘前市大字小栗山字沢部地内  
調査機関：青森県埋蔵文化財調査センター  
調査期間：平成28年4月19日～11月18日  
調査原因：県営小栗山地区通作条件整備事業

## 遺跡の概要

沢部(1)遺跡は、弘前市南東部を流れる大和沢川右岸の標高約115mの段丘上に立地しています。アップルロードの改築に伴い、今年度は昨年度調査を行った沢部(2)遺跡の東側を調査しました。約6,700㎡の発掘調査で、平安時代を中心とする遺構・遺物を確認しました。

## 遺構の種類

縄文時代の竪穴建物跡1棟、土坑5基、平安時代の竪穴建物跡105棟、掘立柱建物跡2棟、溝跡40条、堀跡1条、土坑75基、井戸跡4基、鉄関連遺構8基、柱穴902基が確認され、平安時代の遺構は10世紀後半を主体とします。

平安時代の集落は調査区西側の尾根に沿って南北に構築される堀跡を境にして東側へ広がります。竪穴建物跡は斜面に構築され、数回に渡り建て替えが行われているものが多く見られます。中には何らかの原因で焼失した建物があり、焼土の下から炭化した建築材などが出土しています。また、竪穴建物跡には主として東側に掘立柱建物が付随するものがあります。鉄関連遺構は屋外に鉄生産を行った製鉄炉、竪穴建物内には鉄素材で製品を作る、または補修するための鍛冶炉が見られます。井戸跡は直径約4m、深さ約5mの大きなものが見つっています。

## 遺物の概要

段ボール箱で60箱分出土しました。大半が平安時代の土師器や須恵器で、鉄製品や樹皮巻きその他、焼失した建物からは炭化米や布なども見つっています。

## 遺跡の特徴

発掘調査の結果、沢部(1)遺跡では段丘の斜面地を利用した平安時代の集落と、集落内で鉄生産を行っていたことを示す製鉄炉・鍛冶炉などの各種遺構が確認されました。これらの製鉄炉・鍛冶炉はそれほど数が多くないことから、集落内で必要な分の鉄生産を行っていたものと推定されます。

竪穴建物跡の大半は、それぞれが縦横に走る溝によって区画された中で建て替えられていることが多く、ある程度各家の敷地が決まっていたことが想定されます。また、井戸跡や炭化米・鉄製の土掘り具が見られることから、農耕を行っていた可能性もあります。



焼失した建物内の建築材出土状況

(久保友香理)

しせきつがるししろあとひろさきじょうあと  
史跡津軽氏城跡弘前城跡  
ひろさきじょうほんまるいしがき  
弘前城本丸石垣

—弘前城天守が動いた！世紀の大修理—

所在地：弘前市大字下白銀町1番地

調査機関：弘前市都市環境部公園緑地課

弘前城整備活用推進室

調査期間：平成28年6月6日～12月

調査原因：史跡整備（弘前城本丸石垣修理事業）

## 遺跡の概要

史跡津軽氏城跡弘前城跡は、津軽平野に張り出した丘陵の北端部、標高29～46m地点に立地する近世城郭跡です。城は弘前藩2代藩主・津軽信枚のぶひらの時代、慶長16年（1611）に完成しており、築城から現在まで400年以上の歴史を有しています。

弘前城本丸東側の石垣には以前より膨らみが確認されており、昭和58年（1983）5月の日本海中部地震以降、測量調査を継続して石垣の変位を観察しました。現状のままでは、天守を巻き込んだ石垣崩落の恐れがあるとの診断もあったことから、専門委員会等で検討を重ね、石垣を解体修理することとしました。現段階での修理範囲は、天守台を含む本丸東側石垣100m、南側石垣10mにおける、石垣の下から2石目より上部です。

本丸東側には、古文書の記録等から、3つの時期に構築された石垣が残ると想定されていました。一つ目は、慶長の築城期に築かれたとされる石垣で、北側と内濠の水際付近に見られる野面積のづらづみです。二つ目は、元禄年間に4代藩主・信政によって積み足されたとされる石垣で、中央部の布積ぬのづみ・打込接うちこみはぎの部分です。三つ目は明治時代に崩落し、大正4年（1915）に積み直された近代（明治～大正時代）の石垣で、南側の天守台を含む部分です。天守台北側の東側石垣の高さは、根石ねいしから約13mを測ります。

## 遺構の種類

石垣解体修理に先立ち、弘前市では平成25年度より、本丸平場での石垣背面発掘調査を実施しています。平成25～27年度までは、天守台の北側700㎡程度（約77×10m）を対象範囲として調査を実施しました。その結果、天守台から北に約60m地点までという広範囲において、近代の石垣修理の痕跡を確認しています。近代の石垣修理は、少なくとも天端石てんぱいし（石垣の一番上の石）から250cmの深さにまで及んでいます。これは、天端石から6石目に相当する深さです。近代の石垣の裏込幅うらごめは100cm弱で、径20～30cmの円礫が主体となります。裏込背面の盛土は黄褐色粘土と黒色土の互層となっており、内濠側に流れ込むように堆積するのが特徴的です。

また、調査区北端の約17mの範囲には、江戸時代の元禄年間に築かれた打込接うちこみはぎの石垣に伴うものと思われる盛土層が、天端石の背面まで良好な状態で残っていました。裏込幅は約130cmで、築石の背後に角礫を入れ、その続きに10～20cm大の円礫を詰めた構造をしています。盛土には、整地をしたような痕跡が認められました。

平成28年度は、天守台とその周辺の187㎡、東側石垣北端に残る野面積石垣のづらづみの背面133㎡を発掘調査しました。

天守台上面には、径3～7cmほどの玉砂利が敷かれており、その下に、石垣の石材のような大きな石の層が堆積していました。その更に下層には、黒褐色の盛土層

が分厚く堆積しており、深さ約 130cm（天守台石垣の上から 3 石目に相当する深さ）より下部の地中にまで、ガラス瓶の破片や洋釘（丸釘）等、近代以降の遺物を多く含んでいました。このことから天守台石垣には、全域に渡り天端石から 3 石目よりも下部にまで、近代以降の積み直し工事の手が入っていることが分かります。平面的に見ると、本丸東側石垣の修理対象範囲 100 m のうち、72 m ほどが近代の石垣ということになります。

東側石垣北端の石積みは、当初表面観察から、慶長の築城期の石垣がそのまま残っているものと推測されてきました。しかし発掘調査により、天端石と 2 石目の背面に詰められた裏込うらごめの中から、近代以降のガラス片等が出土し、上部 2 石目までは後の時代に積み直されていることが判明しました。

天端石から 3 石目の背面には、白色粘土の盛土層にパックされた状態で、径 20 ～ 30 cm 程度の円礫を詰めた幅約 2 m の裏込が確認されました。裏込より下層の粘土中から瓦が出土しており、3 石目より下の石垣は、弘前城に瓦が導入された後の築造であることが分かります。また、この粘土層は、17 世紀前葉～半ばの陶磁器も含んでおり、17 世紀後半以降に造成されたものと考えられます。

白色粘土層の上には、元禄げんろくのものと思定される盛土層が堆積します。白色粘土層と幅 2 m の裏込を伴う野面積のづらづみの石垣は、元禄の石垣よりも古いのです。この成果は、慶長の築城から元禄までの間に、この地点で石垣の積み直しが行われたことを示唆するものです。慶長～元禄の間に石垣を積み直したという記録は残っておらず、今回の発掘調査により、新たに発見した事実ということが出来ます。

#### 遺物の概要

天守台では、1 体の石仏が発見されています。石仏は、天守台上面にあおむけの状態で置かれ、下部が欠損していました。保存状態が完全ではないことから、信仰の対象というよりは、石垣の部材として城内に持ち込まれた石仏である可能性が高いものと思われれます。

#### 遺跡の特徴

「石垣」は、立体的な構造物です。今までは、石垣上部の人力で掘れる範囲内において、裏込や盛土の入れ方等、石垣の背面構造を発掘調査してきました。来年 3 月以降は、石垣の解体と同時進行で発掘調査を進めることとなります。石垣の下から 2 石目、つまり内濠の水面よりも深いところまで発掘調査を実施するのですから、非常に規模の大きな調査です。慶長・元禄・近代等、築造時期の異なる石垣の更なる構造解明と、境界の確認、石垣の膨らみの原因等について、今後の調査で把握したいと考えています。



弘前城天守台全景（北西から）

（今野沙貴子）

### 遺跡の概要

後平(1)遺跡は、七戸町(旧天間林村)役場から北東へ約3kmに位置し、八甲田山系東側山麓から流れる坪川の東岸台地に立地します。坪川に開析された台地の両岸には各時代を通じて多くの遺跡が分布しています。旧天間林村管内では、後平(1)遺跡の南に約1.5km離れて所在する森ヶ沢遺跡が著名です。森ヶ沢遺跡は、弥生時代から続縄文時代、飛鳥、奈良、平安時代の集落遺跡で、1993年に国立歴史民俗博物館により発掘調査が行われています。後平(1)遺跡は、2015年に国道45号建設事業に先立つ試掘調査で確認登録された遺跡です。

### 遺構の種類

縄文時代中期末葉の竪穴建物跡1棟、縄文時代と続縄文時代の土坑8基、縄文時代の落とし穴9基を検出しました。

竪穴建物跡は石囲炉を持つ家の跡で、土製の耳飾りが出土しています。落とし穴は、狩猟を目的として掘られた穴で、形には円形(縄文時代早期頃)のものと溝状(縄文時代前期以降)のものがあります。どちらも沢地に面した緩斜面地につくられています。

### 遺物の概要

遺物は段ボール箱で4箱分出土しました。縄文時代中期末と後期の土器、弥生時代の土器、他に少量ですが、北海道に起源を持つ続縄文時代の後北式土器も出土しています。

### 遺跡の特徴

現在は圃場整備により平坦な地形の後平(1)遺跡ですが、発掘調査により、本来は小さな沢が入り込む起伏のある地形であったことが判明しました。

縄文時代には、この沢地に集まった獣を対象に落とし穴がつけられました。弥生時代の遺構は検出されませんでした。埋没沢の一箇所に捨てられた土器から、本調査区のごく近くにその時代の遺構があったものと推測されます。また、数点出土している続縄文時代の後北式土器から、対岸の森ヶ沢遺跡との関係もあったものと思われます。

(小田川 哲彦)



埋没沢から出土した弥生時代後期の土器

### 遺跡の概要

米山(2)遺跡は、青森市役所庁舎から東へ約 9 km の位置に所在し、標高は約 30 m 前後です。遺跡の基盤は、東岳から流出した土石流を含む扇状地性低湿地であり、縄文時代以降も度重なる土石流の影響を受けていることが過去の調査により明らかとなっています。本遺跡は、青森県新総合運動公園建設事業に伴い、平成 10 年から過去 7 回にわたって発掘調査が実施されてきました。今回の発掘調査は、野球場建設予定地が対象であり、約 39,000 m<sup>2</sup> ある対象面積のうち、北側と東側について調査を実施しました。

### 遺構の種類

竪穴建物跡 2 棟、土坑 51 基、カマド状遺構 7 基、井戸跡 1 基、溝跡 13 条、土器埋設遺構 1 基、小ピット（柱穴）129 基を検出しました。土坑の一部と土器埋設遺構は縄文時代のものと考えられますが、その他の遺構は、出土遺物や過去の調査事例などから、ほとんどが中世（13～16 世紀）のものであると考えられます。

### 遺物の概要

縄文時代・古代・中世・近世の土器・石器・陶磁器などが、段ボール箱で 99 箱分出土しました。遺物の多くは土石流などによる二次堆積層から出土したのですが、縄文時代後期後葉の土器が破棄された所から出土したものもあります。中世の遺物は竪穴建物跡や土坑から、陶磁器片（青磁など）や鉄製品、井戸跡から、井戸を構築するための加工材の他、堅果類（トチの実など）が出土しています。

### 遺跡の特徴

調査の結果、中世の竪穴建物跡やカマド状遺構などが見つかったことから、当該期の集落跡であることがわかりました。中には、竪穴建物跡・カマド状遺構・土坑（井戸跡）が近接して検出されており、当時の生活様式を知る上で、貴重な成果となりました。中世の遺構は調査区中央～西側に広がっていくことが予想され、今後の調査により、過去に調査した遺構群とのつながりも明らかになっていくものと考えられます。



（新山 隆男）

井戸跡の様子

## 遺跡の概要

塚長根遺跡は、夷堂遺跡の北側に約 200 m 離れて位置しています。今年の 5 月に行われた、国道 394 号改築事業に先立つ試掘調査で新たに確認登録された遺跡です。

## 遺構の種類

縄文時代の溝状土坑（溝状の落とし穴）16 基を検出しました。

## 遺物の概要

極少量ですが、縄文時代の土器片と剥片が出土しています。

## 遺跡の特徴

検出した遺構はすべて溝状土坑（溝状の落とし穴）であり、遺物が極めて少ないことから、本調査区の範囲は、縄文時代に狩猟場として使われていたことが判明しました。おそらく、この場所からそう遠くないところに落とし穴をつくった人達の集落があるものと推測されます。

（小田川 哲彦）



溝状土坑の精査状況



溝状土坑の土層

### 遺跡の概要

潜石(2)遺跡は、下北半島の北西部、風間浦村役場から北西 5 km の地点にあり、津軽海峡に面した、標高 15 ～ 35 m の丘陵上に立地しています。晴れた日には、北海道亀田半島の恵山を望むことができ、遺跡の周囲は山林となっています。

### 遺構の種類

竪穴建物状遺構 20 基、溝跡 4 条、土坑 7 基、用途不明遺構 3 基が見つかりました。「竪穴建物状遺構」とは、火を焚いた跡や、貼床と思われる濁った土、そしてその上に散乱する炭化物のあり方などから、建物の跡と推定しているものですが、柱の穴が見つからなかったことから、ここでは「状」をつけて報告しています。

柱の穴が見つからなかった点より、この遺構は、地表面を数十 cm 掘り下げて床とし、柱は地表面に突き刺す程度の、きわめて簡易な造りであったと想像されます。また、床面にみられる火を焚いた跡は、燃焼の回数があまり多くなかった様子を示し、遺物が全く出土していない点も考え合わせると、これらは住居のような寝食のための建物ではなく、食料の獲得や生産に伴った仮小屋のような建物ではないかと思われます。多くの床面には白頭山 - 苫小牧火山灰 (B-Tm: 西暦 946 年頃降下) が堆積し、火山灰の上で火を焚いているものもあることから、これらの遺構は火山灰降下の後 (10 世紀中葉よりも後) に使われたものが多いと考えられます。

### 遺物の概要

遺物は、段ボールで 5 箱分出土しました。縄文時代の土器・石器、平安時代～中世と考えられる木製品・鉄器がみられます。

### 遺跡の特徴

発掘調査の結果、潜石(2)遺跡は、食料の獲得や生産などに伴う簡易な造りの建物が、複数建てられた区域であったと推定されます。その時期は平安時代の中頃、10 世紀中葉以降とみられますが、時期の決め手になる土器が出土しなかったことから、ここでは平安時代中頃～中世と、幅広くとらえておき、今後の放射性炭素年代測定の結果に基づいて、時間幅を狭めたいと考えています。このような簡易な造りの建物が複数みつかるとは珍しく、これらを遺した人々の日常の生活の様子や、集落の中心部はどこにあるのか等、多くの興味深い課題が提起されたと言えます。



複数見つかった竪穴建物状遺構

(白線の中)

(木村高)

## 用語解説

### 【円形周溝】 えんけいしゅうこう

円形に溝を巡らせた遺構で、県内では7～12世紀に見られる。中央に土坑をもった墳墓と形態が類似することから、墓の可能性が考えられている。

### 【円筒式土器】 えんとうしきどき

東北地方の縄文時代前期から中期にわたる土器型式で、バケツ状の器形を特徴とする。円筒下層式と円筒上層式に分かれ、下層式は前期に、上層式は中期に編年される。円筒土器を伴う時期・地域の文化を「円筒土器文化」と呼ぶ。

### 【貝塚】 かいづか

食料とされた貝の殻が堆積した跡。貝殻のカルシウムにより土壌が中和されるため、通常の遺跡では残りにくい動物・魚の骨などが残存する。土器や石器の出土をはじめ、人や犬が埋葬される場合もあり、単なるゴミ捨て場ではなくモノを送る場でもあったとも考えられている。

### 【鍛冶】 かじ

金属の製品化や修理の工程。鍛冶炉の周辺から羽口や鉄滓、鍛造剥片などが出土することが多い。

### 【カマド状遺構】 かまどじょういこう

長楕円形の浅い掘り込みをもち、壁面の一方に焼け面を伴う遺構。中世の遺跡で検出されることが多く、屋外のカマドと考えられている。

### 【亀ヶ岡式土器】 かめがおかしきどき

青森県木造町（現つがる市）所在の亀ヶ岡遺跡を指標とする縄文晩期の代表的土器。雲形文や工字文といった流麗な曲線模様を特徴とする。遮光器土偶も亀ヶ岡文化の特徴の一つである。

### 【完新世】 かんしんせい

地質時代区分で最も新しい時代のこと。最終氷期が終わる約1万年前から現

在までを指す。

### 【旧石器時代】 きゅうせっきじだい

人類が打製石器を主要な利器として使用していた時代。このうち、更新世後期終末の3万5000年～1万3000年くらい前の時期を後期旧石器時代という。

### 【グリッド】 ぐりっと

発掘の便宜上調査区に設定するマス目のこと。その発掘における遺跡内の番地と言える。

### 【更新世】 こうしんせい

地質時代の区分の一つで、約258万年前から約1万年前までの期間。そのほとんど氷河時代であった。

### 【後北式土器】 こうほくしきどき

→【続縄文時代】参照。

### 【錫杖状鉄製品】 しゃくじょうじょうてつせいひん

僧侶や修験者が携帯する錫杖に似た、頭部に数個の環がかけられた杖。宗教的な祭祀用具と考えられている。

### 【集石遺構】 しゅうせきいこう

大小の礫が多数集まった遺構。集石の下に土坑が見られるもの、火を受けて焼け石となっているものなどがある。

### 【焼土遺構】 しょうどいこう

土が赤く焼けた、火を焚いたと考えられる痕跡の総称。

### 【縄文海進】 じょうもんかいしん

縄文時代に日本で発生した海面上昇をいう。前期（約6,000年前）にピークがあり、海面は現在よりも2～3メートル高かったと考えられている。

### 【須恵器】 すえき

青く硬く焼き締まった土器で、古墳時

代の中頃（5世紀前半）に朝鮮半島から伝わった焼成技術をもって焼いた焼き物のこと。

**【捨て場・捨て場遺構】** すてば・すてばいこう  
一定のまとまった範囲に遺物が人為的に廃棄・集積された場所。

**【製鉄】** せいてつ  
鉄鉱石や砂鉄から鉄を抽出する作業。製鉄遺跡からは、鉄を製錬した製鉄炉、燃料となる木炭を生産した炭窯のほか、炉を構築するための粘土を採掘した土坑（粘土採掘坑）が認められることもある。遺跡では、鉄塊・鉄滓・炉壁・羽口が出土することが多い。

**【続縄文時代】** ぞくじょうもんじだい  
北海道を中心に縄文時代に後続する時代で、本州の弥生時代から古墳時代中頃に相当する。後半期には後北式土器が広く展開し、東北地方にまで分布するようになる。

**【竪穴住居・竪穴建物】** たてあなじゅうきょ・たてあなたても  
地面を掘り下げて床とし、その上に屋根をふいた住居を竪穴住居という。本県では縄文時代から平安時代までの一般的な家屋である。煮炊きの施設として炉が伴い、古墳時代以降は炉に代わりカマドが壁際につくられるようになる。住居以外の機能も含む建物については、竪穴建物と呼称することもある。

**【鍛造剥片】** たんぞうはくへん  
小鍛冶（こかじ:代表的なのは刀鍛冶）の際に飛び散る不純物の微細片。

**【鉄滓】** てっさい  
大鍛冶（製鉄・精錬作業）の段階で原料鉄から分離される不純物の塊。通称カナクソ。

**【土器埋設遺構】** どきまいせついうこう  
深鉢や円筒形の土器をほぼ原型を保つ

たまま埋設した遺構。炉や入り口などの屋内や、屋外にもつくられる。人骨など埋葬が明らかな例では甕棺と呼ばれることがある。

**【土坑・土坑墓】** どこう・どこうぼ  
土坑は地面に掘られた穴の総称。貯蔵施設と考えられるフラスコ状土坑（断面の形がフラスコに似ている）や、落とし穴と考えられる溝状土坑（Tピット）とよばれるものなどがあり、墓として用いられたものは土坑墓（土壙墓）とよばれる。柱穴などの小さな穴をピットと呼んで区別することもある。

**【半円状扁平打製石器】** はんえんじょうへんぺいだせいせつき  
円筒文化に特徴的な石器の一つ。半円状の形態で縁辺に加工痕が認められる。土掘り具ともいわれるが、用途は不明。

**【羽口】** はぐち  
ふいごの口部分にあたる土製品。

**【白頭山－苦小牧火山灰（B-Tm）】**  
はくとうさんとまこまいかざんばい  
西暦940年頃に降り積もった朝鮮半島北部の白頭山の噴火に由来する火山灰。火山灰は短期間で広範囲に降下するため、複数の遺跡・遺構の年代を知る重要な指標となる。

**【土師器】** はじき  
弥生式土器の流れを汲み、古墳時代～奈良・平安時代まで生産され、中世・近世のかわらけに取って代わられるまで生産された素焼きの土器を指す。

**【貼床】** はりゆか  
住居の内部に土を貼って土間状とした施設。

**【ピット】**  
→【土坑・土坑墓】参照。

**【鞆／吹子／吹革】** ふいご

火力を強めるための送風装置。箱の中のピストンを動かして風を送る。

【フラスコ状土坑】 ふらすこじょうどこう

→【土坑・土坑墓】参照。

【放射性炭素年代測定】 ほうしゃせいいたんそねんだいそくてい

生物中に含まれる炭素 14 が、死滅後 5730 年で半分の量になる性質を利用した年代測定。試料中の放射線量を測定することで年代を割り出すことができる。

【掘立柱建物】 ほったてばしらたてももの

地面に穴を掘って柱を立てた、平地式や高床式の建物。

【堀（濠・壕）】 ほり

地面を細長く掘り下げ一定の範囲を区画する遺構。集落や城郭、町、墳墓の周囲に設けられることが多い。

【埋設土器】 まいせつどき

→【土器埋設遺構】参照。

【溝状土坑】 みぞじょうどこう

Tピットとも呼ばれる。

→【土坑・土坑墓】参照。

【盛土遺構】 もりどいこう

土砂や遺物を継続的に廃棄した結果、周囲よりも高く盛り上がった遺構。

【緑釉陶器】 りよくゆうとうき

銅により緑色に発色した釉薬をかけた陶器。奈良時代には唐（現在の中国）から伝わったとされるが、県内では平安時代の遺跡で少数確認される。

【炉】 ろ

調理や暖を取るために繰り返し火を焚いた場所。地面で直接火を焚いた地床炉、周囲を石で囲った石囲炉、土器を埋め込んだ土器埋設炉、土器片を敷き詰めた土器片敷炉など、時期・地域によって様々な種類がある。縄文時代中期末葉には土器埋設炉と石囲炉が組み合わせられた複式炉とよばれるものもある。住居の中に作られたものを屋内炉、外に作られたものを屋外炉と呼ぶこともある。

## ■引用・参考文献■

青森県 2001『青森県史 自然編 地学』

阿部猛ほか編 1995『日本古代史研究事典』

東京堂出版

江坂輝禰ほか編 1983『日本考古学小辞典』

ニューサイエンス社

大川清ほか編 1996『日本土器事典』雄山閣

小野正敏ほか編 2007『歴史考古学大辞典』

吉川弘文館

加藤晋平・鶴丸俊明 1980『図録石器の基礎

知識 I - 先土器 (上) -』柏書房

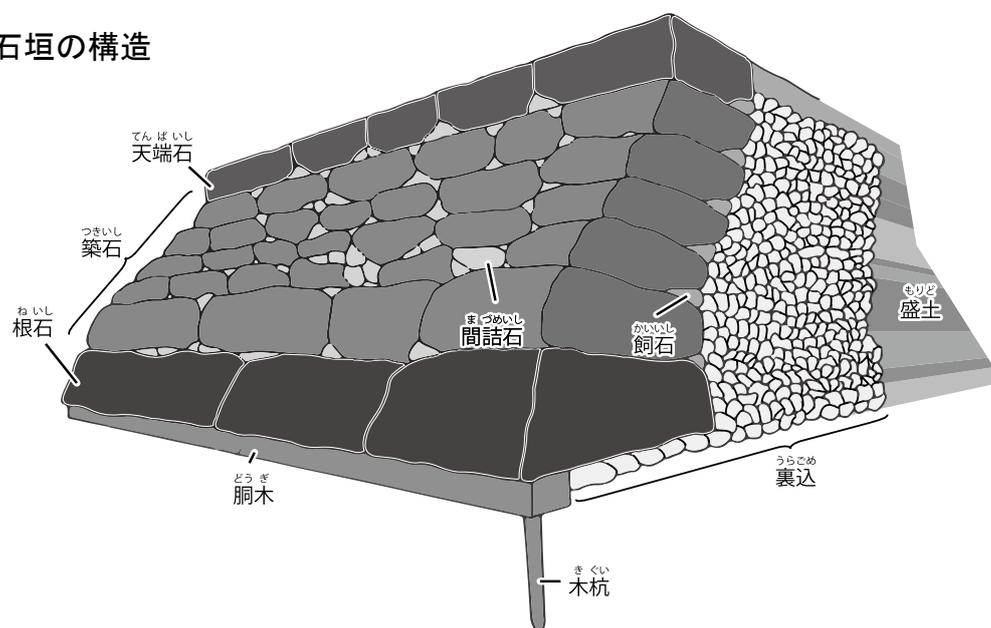
旧石器文化談話会編 2000『旧石器考古学辞典』

学生社  
小林達雄監修 2008『総覧縄文土器』アム・プロモーション

田中琢・佐原真ほか編 2002『日本考古学事典』三省堂

## 図解：城郭石垣関連 用語

### 石垣の構造

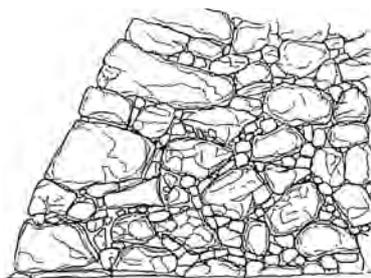


【天端石】 てんばいし 石垣の一番上の石。

【根 石】 ねいし 石垣の一番下の基礎となる石。

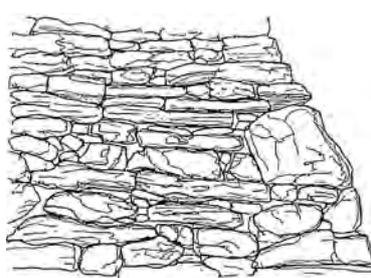
【裏 込】 うらごめ 盛土と築石の間に詰め込んだ玉石。排水を助けたり石垣を安定させる機能がある。

### 石垣の石材と積み方



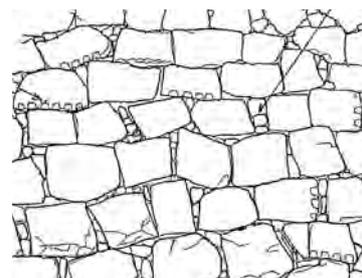
【野面積】 のづらづみ

自然石または多少の加工をした割石（野面という）を積み上げたもの。



【布積】 めのづみ

均等に重量がかかるよう横目地を通し、一段ずつ積み上げたもの。



【打込接】 うちこみはぎ

採石場で割りとった石を加工して形を整えて積み上げたもの。

（挿図は弘前市提供）

# 年 表

年 代	時代・時期		県内の代表的な遺跡	主な土器・石器など	県内の主なことから
約30,000年前	後期旧石器時代		<b>安部</b> (東通村) 田向冷水(八戸市) 大平山元Ⅱ・Ⅲ(外ヶ浜町) 五川目(6)(三沢市)	ナイフ形石器 槍先形尖頭器 細石刃	針葉樹林帯における 狩猟・採集生活  氷河期の終焉
約13,000年前	縄 文 時 代	草創期	長者久保(東北町) 大平山元Ⅰ(外ヶ浜町) 表館(1)(六ヶ所村) 櫛引(八戸市)	局部磨製石斧 無文土器 隆起線文系土器 爪形文系土器 多縄文系土器	土器づくりが始まる(最古の土器)  弓矢による狩猟の発達 落葉広葉樹林帯の形成 定住生活
約9,000年前		早 期	日計(八戸市) 吹切沢(東通村) 根井沼(三沢市)	押型文系土器 沈線・貝殻文系土器 条痕文系土器 縄文系土器	縄文海進の始まり 貝塚の出現、尖底土器の使用
約6,000年前		前 期	<b>野口貝塚</b> (三沢市) 長七谷地貝塚(八戸市)	長七谷地Ⅲ群土器 円筒下層a式土器 円筒下層b式土器 円筒下層c式土器 円筒下層d式土器	円筒土器文化の始まり 大規模集落の形成と大量の土器
約5,000年前		中 期	三内丸山(青森市) 水上(2)(西目屋村) 二ツ森貝塚(七戸町) <b>一王寺(1)</b> (八戸市) 餅ノ沢(鯉ヶ沢町) <b>後平(1)</b> (七戸町)	円筒上層a式土器 円筒上層b式土器 円筒上層c式土器 円筒上層d式土器 円筒上層e式土器 大木式系土器	他地域との活発な交易  大規模貝塚の形成  円筒土器文化の終焉
約4,000年前		後 期	葦窪(八戸市) 小牧野(青森市) 十腰内(弘前市) 堀合Ⅰ(平川市) <b>内田(1)</b> (むつ市) 風張(八戸市)	牛ヶ沢(3)式土器 十腰内Ⅰ式土器 十腰内Ⅱ式土器 十腰内Ⅲ式土器 十腰内Ⅳ式土器 十腰内Ⅴ式土器	十腰内文化の始まり 大規模環状列石の出現 石棺墓・甕棺墓など特殊葬制 祭祀遺構・遺物の多様化 (動物意匠遺物)
約3,000年前		晩 期	五月女菴(五所川原市) 亀ヶ岡(つがる市) 是川中居(八戸市) 大森勝山(弘前市)	大洞B式土器 大洞BC式土器 大洞C1・C2式土器 大洞A・A'式土器	亀ヶ岡文化の始まり  卓越した土器製作技法と 豊富な器種 漆文化の発達
約2,000年前	弥生時代	前 期	砂沢(弘前市)	砂沢式土器	米づくりの始まり
		中 期	垂柳(田舎館村)	二枚橋式土器	遠賀川系土器
(西暦250年頃)	古墳時代	後 期	板子塚(むつ市)	田舎館式土器 天王山式土器	稲作と狩猟・採集の生活
		前 期	隠川(11)(五所川原市)	土師器・須恵器	寒冷な時代 希少な遺跡数
約1,000年前	平安時代	中 期	森ヶ沢(七戸町)	後北式・北大式	かまど付き方形竈穴住居の構築 北方文化との強い結びつき
		後 期	田向冷水(八戸市) 市子林(八戸市)		
(西暦710年)	飛鳥時代 奈良時代	阿光坊古墳群(おいらせ町) 白蛇(八戸市)	土師器・須恵器	蝦夷の地、律令国家の支配地外 終末期古墳群の造営 馬産の開始	
(西暦794年)	平安時代	<b>夷堂</b> (七戸町) <b>内田(1)</b> (むつ市) <b>郷山前村元外</b> (青森市) <b>沢部(1)</b> (弘前市) 五所川原須恵器窯跡群 (五所川原市) <b>潜石(2)</b> (風間浦村)	土師器 須恵器 灰釉・緑釉陶器 擦文土器 かわらけ 陶磁器(中国産)	集落の急激な増加(集団移住?) 五所川原に日本最北の須恵器窯 塩・鉄関連遺跡の増加 十和田湖の噴火と降灰(915年頃) 白頭山の噴火と降灰(940年頃) 環壕集落や防御性集落の出現 奥州藤原氏の支配	
(西暦1192年)		鎌倉時代 室町時代	十三湊(五所川原市) 福島城(五所川原市) <b>米山(2)</b> (青森市)	珠洲・常滑・瀬戸 (国産) 青磁・白磁・染付 (中国産)	御家人の配置 安藤氏の繁栄と南部氏の台頭 他地域・国外との交易活発化 中世城館の構築
(西暦1590年)	安土桃山時代 江戸時代	野脇(弘前市) 三戸城(三戸町) 堀越城(弘前市) <b>弘前城</b> (弘前市)	肥前系陶磁器 小久慈焼(八戸領) 悪戸焼・下河原焼 (弘前領)	南部氏の支配と津軽氏の独立 盛岡藩・八戸藩・津軽藩の支配	

※太字(ゴシック体)は本日発表予定の遺跡

---

編集 青森県埋蔵文化財調査センター

〒038-0042 青森市新城字天田内 152-15

TEL : 017-788-5701 FAX : 017-788-5702

<http://www.ao-maibun.jp/>

---



青森県埋蔵文化財調査センター  
ホームページ

表紙写真 上：夷堂遺跡

左下：縄文時代の土製品（内田（1）遺跡）

右下：平安時代の炭化した米（沢部（1）遺跡）

裏表紙写真

縄文時代の土偶（内田（1）遺跡）